

総合病院国保旭中央病院で診療を受けられる患者さんへ

総合病院国保旭中央病院では、以下の研究を実施しております。

研究の対象になる可能性がある患者さんで、診療情報が研究目的で利用されることを望まれない方は、下記のお問い合わせ先にご連絡下さい。

1. 研究課題名

SUVを用いたドパミントランスポーターイメージングの集積定量化

2. 研究の対象患者

神経変性疾患に関する核医学検査（ドパミントランスポーターイメージング）を受けられた方

3. 研究の対象期間

2016年1月1日～2017年5月31日

4. 研究の概要

ioflupane(ダットスキャン、日本メジフィジックス社)を用いたドパミントランスポーターイメージング（以下DTI）は、パーキンソン病をはじめとした神経変性疾患の鑑別ないし早期診断に有効な核医学検査の一種である。両側線条体の集積が対称性、コマ状に描出されるのが正常、集積が低下しドット状に変形するのが異常とされるが、視覚評価のみでは客観性、再現性に限界があるため、集積の定量化が参考になる。現在DTIの定量指標として最も汎用されているのは、全脳と基底核領域の放射能カウントから算出されるSBR(specific binding ratio)である。しかし、SBRには①ある程度自動化されたソフトを用いるものの、解析者によって数値のばらつきが発生しうること、②脳室が拡大した症例などで値が過小評価され得る事、等の欠点が知られている。近年SPECT/CT検査における集積程度をSUV(既にPETで汎用されている半定量的指標)で表現する手法が複数開発されている。その一つがGI-BONE(AZE社)であり、本プログラムは元々骨SPECT/CTの定量目的で開発されたが、原理上は他の核種にも応用可能である。関心領域内の最大SUV(SUVmax)、最大点周囲の小領域における平均SUV(SUVpeak)はSBRとは異なり、評価者間のばらつきが発生し得ないというメリットがある。

DTIが施行された患者に対して両側線条体の集積をSBR、SUVmax、SUVpeak、および手動で設置した関心領域における平均SUV(SUVmean)で表現し、各パラメータ間の相関を解析すること、および、両者を用いた疾患診断能の比較検討を行うことを目的とする。

SUVが既に汎用されているSBRと有意に相関すること、診断能の観点でSBRに劣らないことを確認できれば、DTIの評価におけるより優れた定量指標として今後活用できることが期待される。

5. 研究実施予定期間

2017年1月18日～2018年3月31日

6. 研究に用いる試料・情報の種類

情報：識別コード、TI施行例の年齢、性別、検査目的、画像データ、臨床診断

7. お問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。

ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保証に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。

また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としないので、下記の連絡先までお申出下さい。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

(連絡先) 地方独立行政法人 総合病院国保旭中央病院

・研究責任者：核医学科 吉田 勝哉

・臨床研究支援センター

電話：0479-63-8111(代)